



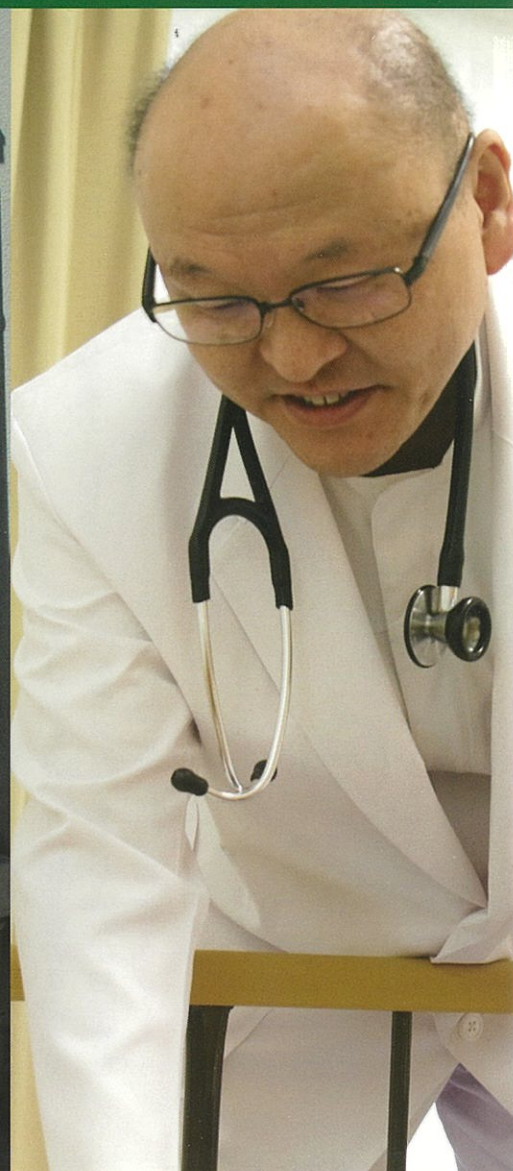
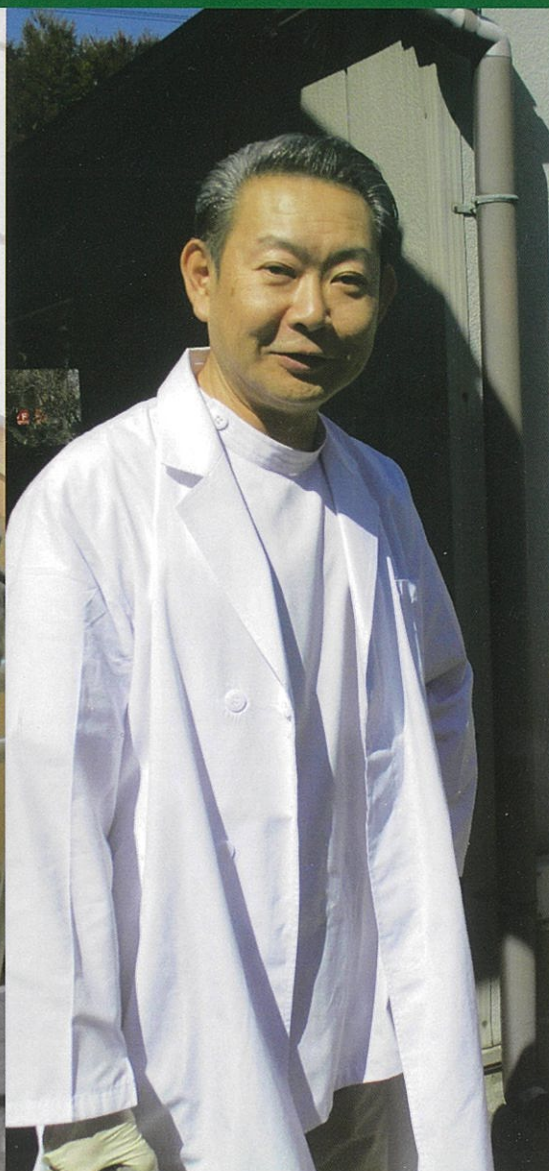
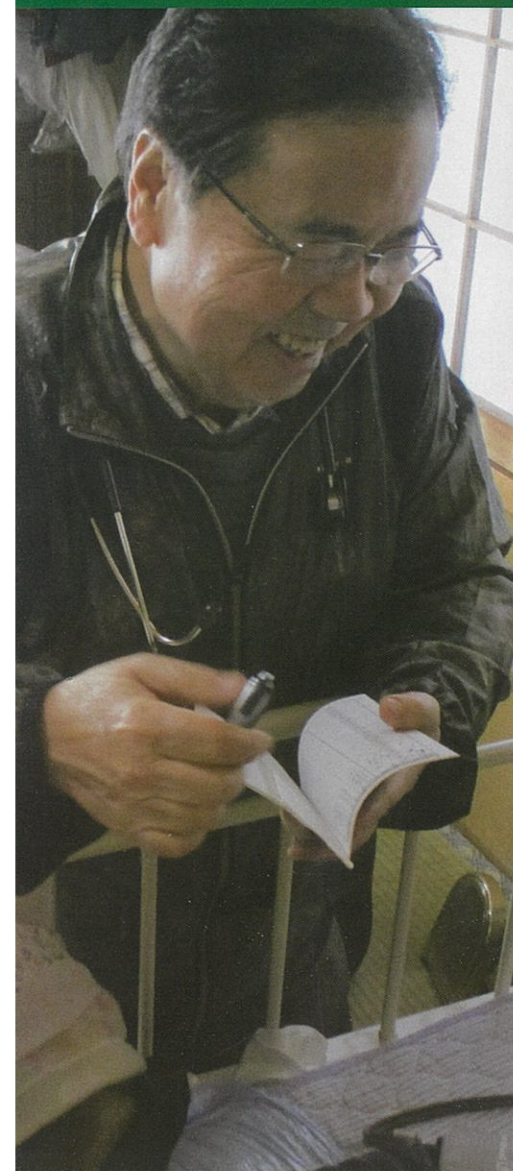
ご自由にお持ちください。

# 在宅医療

## interviews

在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face



# 在宅医療ってなに？

## 契機

まだまだ知らないことの多い在宅医療の世界を皆さまに知っていただく最初の一步として、この地域で在宅医療に取り組まれている3名の医師にお話を伺いました。仕事へのスタンスやプライベートなど詳細に語って下さいました。

— 医師になられたきっかけは

「子供の頃、何人かのお医者さんが我が家に往診にきてくれたのですが、往診かばんを手に携えてくる先生方がみなかつこよかったので、医師になりたいなと思いました」

— 在宅医療を始められたきっかけは

「子どもの頃に往診にきてくれた先生にあこがれて医師になった経緯があるので、生まれ故郷の西那須野に戻りクリニックを開業した当初から在宅医療に取り組みました。まずは親戚から始

# 小沼 一郎

医師

こぬま いちろう

インタビュアー 渡邊 恵美  
(地域包括支援センターさちの森)

小沼内科胃腸科クリニック



旧西那須野町出身。順天堂大学医学部卒業後、順天堂大学医学部内科学（消化器）講座を経て、平成2年に故郷である西那須野町に小沼内科胃腸科クリニックを開業。外来診療の傍らで在宅医療にも携わる。平成29年より那須郡市医師会長。

## 在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face

め、知り合い、近所へと徐々に広がっていきました。若いころからの知り合いや、同級生の親などを外来や在宅で診療できるのは、生まれ育った地元で恩返しができるといううれしいうれしい限りです。今、外来にこられている高齢者のうち20〜30名は在宅医療予備軍と感じております。その方々が外来にいらつしやるのが難しくなったら在宅で診療を継続し、最期を看取ることができればよいなと思っております」

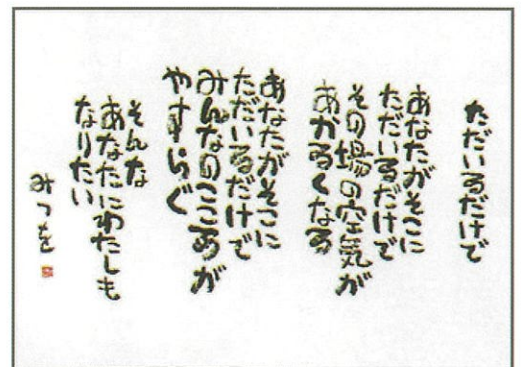
## 診療

— 現在、何名の患者さんの訪問をなさっていますか

「3名です。外来には毎日120〜130名がいらつしやるので、在宅医療を息ながく続けるためには、この位の件数がちょうど良いと思っています」

— 在宅医療のどの点に魅力を感じますか

「自宅で人生の最期を迎えたいという患者さんとその希望をかなえさせてあげたいと願うご家族のために、医療・介護関係者が協力しながら、希望通りうまく看取ることができた時ですね」



事務室には人柄が垣間見える詩が飾られていた

— 訪問看護師と連携されることはありますか

「在宅の患者さんには基本的に訪問看護を利用してもらっています。外来診療の時間帯は在宅への対応が難しいので、よほどのことでない限りまずは訪問看護師さんに一次対応をお任せし、外来終了後に外向くといった工夫をしています。訪問看護師さんと気心の知れる顔の見える関係を作っていくことは、在宅医療を行う上でとても重要です」



## 訪問看護師以外に在宅関係の多職種と関わりを持つことはありませんか

「息子さんと2人暮らしで寝たきりのおばあちゃんの在宅医療を担当していたのですが、ある日突然息子さんの体調が悪くなり、入院した途端にお亡くなりになってしまいました。私はおばあちゃんの今後をどうしたらよいのかと困っていたのですが、ケアマネジャーさんなどそれまで在宅生活を支えていた多職種が素早く協議し、その日のうちにショートステイへの入所が決まりました。多職種間の連携がスムーズにできていなかったら、おばあちゃんの人生は成り立たなかったのだらうなど実感した貴重な経験でした」



今は少なくなったが、昔は「洗面器とタオル」を往診先のお宅が準備してくださっていたとのこと

## 在宅医療に携わって特に印象に残った出来事はありますか

「同じ時期に看取った対照的な2人の患者さんです。1人はお金持ちで大きなお宅に住んでいたのですが子供たちと折り合いが悪く1人暮らしでした。ある日、訪問看護師さんが訪ねたら独りで亡くなっていました。もう一方は、小さなお宅に住んでいた寝たきりのおばあちゃんですが、血のつながりのない2人の養子の方がすごくよく面倒をみて、皆でその方を囲みながら看取ることができた際には、家族関係がとても重要なのだと思われました。ただし、本人や家族が自宅で最期まで過ごすことを望んでいるのに、親戚が突然現れて『病気なのになぜ入院させないの?』と言いつつ出すなど、むしろ1人暮らしの方がうまくいくのではないかと思われるケースもあります」

## 課題

### 在宅医療に携わる医師はどうしたら増えるのでしょうか

「在宅医療への参入には24時間・365日対応がネックとなっているのだと思います。医師は基本的には真面目で責任感が強いので、自分だけではとてもできないと感じ二の足を踏んでし

まうようです。夜間や外来診療中は訪問看護師と連携すること、休日や旅行の際は他の医療機関と連携すること等負担を軽減するための制度や、経験者の知恵を伝えていくことが必要です。外来で診察していた患者さんを引き続き在宅で少しずつ診はじめ、携わる医師が増えることで、医師1人1人の負担が軽減されていくと良いと思つてます」

## 継承

### 息子さんもお医者さんだとお聞きしました

「3人の息子のうち2人が医者になりました。今度、1人が西那須野に帰ってきてクリニックを継ぐことになりました。私が楽しそうに診療している姿を見て、それも良いと思つて継いでくれるのかなと思うととてもうれしいです。今後は息子も在宅医療に携わりますので、私の人生の最期の時を息子と家族に看取ってもらおうのが今から楽しみです」



## 余暇

### 趣味はありますか

「運動とお酒を飲むことです。平日は診療があってもなるべく水泳をしています。昼休みにプールに出かけ1000〜1500m泳いでから昼食をとっています。高校生の頃は水泳部に所属し県2位の成績をあげたこともあります。得意種目は自由形の長距離とバタフライです。しかし大学時代に泳いでいる時の写真を友達に見せたら『まるで豚の自殺だ』とからかわれました……。また、水泳だけでなく足が弱くなるので普段から歩くようにし、休日はゴルフをしています。毎日の晩酌はビールとワインをボトル半分です。おいしくお酒を飲むために運動をしているようなものなので毎晩が楽しみです」



小沼内科胃腸科クリニック  
那須塩原市西朝日町6-4 2  
0287-37-5353  
<http://konuma-clinic.jp/>

## 契機

「医師になられたきっかけは」

「子どもの頃は病気がちでよく病院に通っていました。やたらと病院慣れした子供になり看護師さんと話し込むなど医療がとて身近でしたので、そのころから医師になりたいと思っていました。小学校の卒業文集にも将来の夢は医師と書いていました」

# 三森 薫

医師

みもり かおる

インタビュー 黒崎 史果  
(那須塩原クリニック)

三森医院

「在宅医療を始められたきっかけは」

「30年前、山形大学を卒業したての頃、当時としては珍しく大学病院ではなく一般病院で初期研修をしました。その病院が在宅医療に力をいれていたのがきっかけです。医師が自治会の会合に出向き健康講話をしながら住民の相談に乗るなど地域に密接に関わっていました。訪問看護なども他の地域に先駆けて取り組んでいました。その経験から、東京や北海道などを経て、那須塩原に帰ってきた後も、抵抗なく在宅医療に馴染めました」

## 診療

「在宅医療の中でも特にどの分野に興味がありますか」

「一番関心があり携わりたいと思うのは看取りです。元々は外科医で、中でも肺がんを専門としてきました。肺がんは手術などをして2年程で再発することが多い病気なので、最終的にはがんによる苦痛や治療の副作用を軽減したり、生活の質を高めたりすることを目的にした緩和ケアに携わることになりました。自宅で最期を迎えたいという患者さんも多くいるので、それをサポートできればよいなと思いました。ただし、今は診療の他にも医師会の会議や保育園や学校検診、産業医活動、介護認定審査会などに時間がとられて在宅医療が思うようにできていないのが現状です」

「在宅医療に関わられて印象に残った出来事がありますか」

「山形にいた頃、当時としては珍しく告知された肺がんの患者さんが最期を家で迎えたいと希望され在宅医療を担当しました。子供も孫もひ孫もいる大家族のおじいちゃんの死を、ご家族が目の前で迎えることで様々なことを学んでいく姿がとても印象的でした。悪い面で印象に残った出来事では、病



診察の間も、やさしい笑顔で患者さんに語りかける

院から末期がんの患者さんが退院するから在宅医療をお願いしたいと依頼があり、退院の連絡を2週間程待っていたのですが、実は知らないうちに退院していたというケースです。もしも、往診前に亡くなっていたら死亡診断書が書けなかったですね。前医からは正確な情報と連絡が欲しいところです」

「訪問される範囲は」

「医院での午前・午後の外来診療の合間に訪問しているのですが、あまり遠くまでは行きません。車で15分までを目安としています。以前医院のそばだからと依頼があり行ってみたら、遠い那須の山奥だったことがありました。一度受けたのでその方は最期まで看取りました。が・・・」



旧黒磯市出身。山形大学医学部卒業後、鶴岡共立病院などで内科、外科、小児科を研修。その後も複数の病院で勤務したのち、平成14年から三森医院にて地域密着の医療を行っている。

## 在宅医療を支える医師の素顔をおとどけします

The doctor's natural face

「外来診察の時間内に急変などがあった場合にはどうされていますか」

「よほどのことがない限り外来患者さんを放って訪問するわけにはいかないので、一次対応を訪問看護師にお願いして、外来がひと段落した時点で訪問するという形をとっています。そのため依頼を受ける際には必ず訪問看護師にも支援をお願いしています。ほとんどのケースは訪問看護師の対応で間に合うので、訪問看護という仕組みがあつてとても助かっています」

「他に在宅関係の多職種との関わりはありますか」

「介護保険を利用している患者さんの場合、ケアカンファレンスに参加するようにしています。患者さんのお宅に出向くことは難しいので、うちの医院でカンファレンスを開いてもらって



お義父さまから受け継がれたレトロな往診鞆の中には血圧計やのどの状態を診る器具なども

参加するようにしています。ケアマネジャーさんからは医師との連絡が取りにくいという悩みがよく聞かれますが、私の場合にはいつでも電話をしていただいて構いません」

「施設での診療もされていますか」

「施設の嘱託医ではないですが、依頼があり訪問することがあります。施設から頼まれて看取りをしたこともあります。今後は高齢者施設への住み替えも進むのでしようし、そこでの看取りも多くなっていくのでしようね」

## 余暇

「息抜きをされていますか」

「仕事終わりの晩酌と2匹飼っている愛猫との時間です。最近、猫が子供を産んだので貰い手がなければ今後4匹ということになるかもしれません。また、ある程度まとまった休みが取れた時には旅行に行きます。昨年は九州にいる息子のところに行きました。その他には家族と洋食屋さんや回転ずしによく行きます。患者さんにはそこでよく目撃されています」



可愛らしい黒猫ちゃんを愛おしそうに抱きしめる三森先生

「在宅の患者さんがいるからお酒を飲むことや旅行ができないということはないですか」

「看取り時期の患者さんを担当している際には、夜に呼び出しがあるかもしれないので、お酒を飲むことは控えますが、健康のための断酒の時期と思えば良いのかもしれませんが。旅行や学会などで遠出をする際には近くの菅間記念病院さんに紹介してから出かけるようにしています。在宅医療も生活サイクルの一部になっているので、特に大変ということはありません。それよりも医師会の雑務がしんどいです」

「血液型は何型ですか」

「興味のあることは徹底してやるけれども、興味のないことはまったくやらないB型です。血液型診断などに根拠はないと思うのですけれども好きで

信じている節があります。占いなども好きでいろいろ本を買っています。占いによると平成30年は「派手なことはせぬが吉」とあつたので、おとなしく過ごしたいと思います。朝もテレビの占いをみて、それを信じながら一日を過ごすようにしています」

## 課題

「在宅医療に携わる医師を増やすには、どのような工夫が必要でしょうか」

「我々のような医院や小さな病院の医師が在宅医療へ参画する上でネックになっているのは、24時間の対応が難しいという認識です。在宅医療に不慣れな医師に、医療機関や訪問看護との連携の方法などのノウハウを知っていただく機会を作ることが必要だと思います」



### 三森医院

那須塩原市宮町1-9

0287-62-1095

<http://park20.wakwak.com/~krta kana/>

## 契機

「医師になられたきっかけは

「代々医師の家系だからです。元々はエンジニアになりましたので、大学受験では工学部を受験しようとした親に内緒でこっそり願書をだしたのですが、学校伝いにばれてしまい受けられませんでした。他の仕事には縁がないみたいです」

「在宅医療を始められたきっかけは

「今から20年程前に、診療所で医師をしていた父が引退するので、大学病院を辞め、引き継ぐ形で始めました。大病院の患者さんは来たからにはとことん診てほしいと、待ち時間が長くても、お金がかかっても怒りません。一方診療所では、待ち時間やお金がかかることが嫌という方が多いので、引き継いだ当初はそのギャップに戸惑いました。また、在宅医療や外来では診療の焦点を絞らなくてはいけないし、できる事とできない事をスピーディーに判断しなくてはいけないので若い時には戸惑いました」

# 原 真 医師

はら

まこと

原内科小児科医院

インタビュー 渡邊 恵美  
(地域包括支援センターさちの森)



旧西那須野町出身。平成9年より原内科小児科医院院長として勤務。午前中は診療所での外来診療。午後は施設や在宅へ訪問し、地域に密着した在宅医療に力を入れている。猫愛好家。

## 在宅医療を支える医師の素顔をおとどけます

The doctor's natural face

## 診療

「1日のながれを教えてください」

「朝6時に起きて、10匹飼っている猫の世話をし、午前は外来で診療し、お昼過ぎから訪問、夕方に戻って猫の世話をし、カルテ記録をするという流れです。忙しいときは深夜や朝早くによばれることもあるので睡眠時間も短くなりがちです。20年間そのリズムは変わらないです」

「訪問の際は看護師が同行しますか。」

「また、訪問看護師と連携を図ることはありますか」

「基本的には1人で診療をしています。最近では必要時には訪問看護師さんに依頼する事はあります。若いころは1人で夜の9時くらいまで往診をしていました。しかし、夜遅くなると相手にも迷惑となるので、今は早い時間に訪問できるよう努力をしています。ただし緊急時はいつでも駆け付けられるようにしています」

「付き合いが長い患者さんはいますか」

「20年前から診続けている92歳の患者さんがいます。その方の義理のお母さんを診ていたことがきっかけでした。去年亡くなった106歳の方も20年間診療をしていました。4世代診えている患者さんもいます」



皮肉も交えながらも、笑顔を決やさずインタビューにお答えいただいた

「それだけ親密になるとお葬式や結婚式などのプライベートな付き合いもありますか」

「いいえ。患者さんのプライベートに関わるというのが父からの教えでしたのでそれを守っています。様々な家庭の事情を知らないで深入りすると後で大変な目に合うこともありますから、口出しをすることも控えています」

「心がけている事はありますか」

「患者さんが良いと思う方向に援助するのが私たちサービスマンなので、患者さんやそのご家族にありがとうと思って頂けるように努力しています」

### 在宅医療で良かった思い出は

「良かったと思ったのが、息子さんがちょうど仕事に出かけたところで患者さんが亡くなりそうになったので駅に電話をして電車に乗るところを止めて引き返してもらって、ギリギリ看取りに間に合わせる事ができました。その時は役立てたと思えました」

### 在宅医療で困った経験は

「お金を払えないというご家族、夜逃げした患者さん、注射をしようとしたら殴ってきた認知症の方、7割は国から支払いがあるのだから自己負担は払わないでいいだろうと開き直る方、保険証が切れていて診療費をいただけなかった方など様々な困り事はありました。若いときは事あるごとに怒っていました。年齢を重ねて割り切るようになってきました。腹も立てません。原だけに」



午後には颯爽と白衣をなびかせて患者さんのお宅へ向かわれた

### 災害時にご苦労なされたそうですね

「東日本大震災の際には、すべての患者さんの家を回りました。高齢者施設で入浴中に被災された方なども濡れた状態で外に出さななきゃならないような事態でしたので大変でした。当時106歳の患者さんが『生まれてはじめてこんなおつかない目にあつた、関東大震災よりも怖かったよ』とおっしゃっていたのが印象深かったです」

### 患者さんのご家族に対してはどのようにケアをされていますか

「在宅で療養を始める段階で、ご家族には1人で介護するのは無理なので、近くにいるご兄弟・ご親戚と協力することを勧めています」

## 余暇

### お休みの日はどのように過ごされていますか

「うちの診療所は月曜から土曜日まで週6日診療ですし、日曜日にも患者さんに呼ばれることもあるので、なかなか休みがとりにくいです。もし時間が取れるならドライブがしたいです。実は今日、仕事には絶対使わないぞと決意して買った車のエンジンをかけようとしたらバッテリーがあがっていました。ショックでした。5年で6000km



診療所の受付には小児科らしくかわいらしいケロちゃんなどの人形たちが飾られていた

## 課題

### 在宅医療に携わる医師はなぜ増えないのでしょうか

「外来に比べて経営面でメリットが少ないことではないでしょうか。そうでなければもうすでに増えているはず。診療所で座って患者さんが来るのを待っていた方が体力面も気力面でも楽だし、収入面でもメリットがありますし」

### それでも在宅医療を続けてこられた理由は何ですか

「ただ辞めにくいだけです。親の代からの診療所ですから、患者さんも親も診てもらっていたのだから自分も当然診てもらえると信じているようなので、おいそれとやめられないです。ただし、60歳になつたらきっぱりやめるつもりです。今48歳なので12年後が待ち遠しいです」

「猫ちゃんはかわいいですか」  
「猫は好きで飼っています。実は猫アレルギーなのですが抗アレルギー薬を飲んで世話をしています。患者さんのお宅で診療をしても猫好きがわかるのか寄ってきます。往診カバンに猫が入ってしまったこともあります。ただし、くれぐれもうちに捨てていけないくださいね」



原内科小児科医院  
那須塩原市西原町8-35  
0287-36-0732

# 在宅医療 interviews

2018年 春夏号

2018年 4月15日発行

## 『在宅医療interviews』

次号発行予定  
秋冬号 2018年11月

年2回発行予定  
4月（春夏号）・11月（秋冬号）

### 【配布方法・配布場所】

市役所・医師会・医療機関  
介護事業所他

### 【配布地域】

栃木県那須塩原市・大田原市  
那須町他

## STAFF

### ◎発行

那須郡市医師会

### ◎企画・デザイン・編集・写真

那須郡市医師会  
在宅医療連携拠点整備促進事業  
那須塩原市多職種連携会議

### 『在宅医療への関心を深める』班

#### 原 真 医師

(原内科小児科医院)

#### 黒崎 史果 医師

(那須塩原クリニック)

#### 渡邊 恵美 保健師

(地域包括支援センターさちの森)

#### 秋葉 喜美子 看護師

(西那須野マロニエ訪問看護ステーション)

#### 猪股 英明 薬剤師

(君島薬局稲村店)

#### 高橋 秀介 理学療法士

(菅間記念病院)

### ◎似顔絵

#### ひでお

(似顔絵ボランティア)

## 在宅医療 豆知識

# 訪問看護ステーション

どのような役割なの？



看護師などがご自宅に訪問し療養生活を送る方の看護を行うサービスです。本人や家族の意思、ライフスタイルを尊重して、生活の質が向上出来るよう、予防的支援から看取りまでを支えます。

具体的なサービス内容は？



病状の管理や点滴、吸引、経管栄養、創傷処置、チューブ交換等の医療処置を行う他、療養についての相談に応じることもできます。エンドオブライフケアの時期においては苦痛の緩和、緊急時・24時間対応、死亡時のファーストコール対応も含めた在宅看取りを支援します。リハビリ専門職が所属する場合は生活機能の維持・改善に向けた機能訓練等も提供できます。

※医療保険・介護保険どちらでも訪問可能です。

※訪問看護を利用するには、主治医の指示書が必要です。まずはご相談ください。

那須塩原市のどこにあるの？



#### 西那須野マロニエ訪問看護ステーション

(那須塩原市井口537-3 ☎ 0287-37-6322)

小児から超高齢者まで幅広く訪問しています！リハビリスタッフも充実しています



#### ほほえみ訪問看護ステーション

(那須塩原市大黒町2-5 ☎ 0287-63-5690)

親切、丁寧に笑顔でケアいたします (๑\_`)\_๑)



#### 訪問看護ステーション那須

(那須塩原市豊浦10-706 ☎ 0287-73-5048)

スタッフ一丸となって、安心と笑顔をお届け致します



#### なすの訪問看護ステーション

(那須塩原市緑1-8-43 ☎ 0287-46-5770)

看護師・理学療法士・言語聴覚士・作業療法士・歯科衛生士の各専門職を配置しています



#### 訪問看護ステーション つぼみ

(那須塩原市佐野2-19 ☎ 0287-60-3737)

心が通い合う在宅療養を提供させていただきます

(平成30年3月現在)

## 似顔絵

今回、先生方の似顔絵を描いていただいた  
那須塩原市在住の「ひでお」さんです。  
デイサービス等で似顔絵ボランティア活動中  
希望の方は下記までご連絡ください

[iroenpitu87@yahoo.co.jp](mailto:iroenpitu87@yahoo.co.jp)



那須塩原市の医療・介護等の多職種連携会議の中で「在宅医療への関心を深める」という役割を与えられた私達グループは、まずもってこの壮大なテーマの前に途方に暮れ立ち尽くしたわけです。在宅医療を志す若手医師（もしくは元若手医師）を増やす取り組み？関係機関に在宅医療に興味を示してもらうための企画？・・実に難題でした。毎月の会議の中でどうにか手がかりを得ようと、すでに在宅医療に関わっている医師にすがると、うにお話をお聞きすると、興味深い在宅医療の世界がおぼろげながら見えてきました。「もしかしてこの面白さがあるのままだに皆さんにお伝えするのが、早道なのでは？」と感じ、インタビュー誌の作成に取り組み始めました。日頃お仕事以外で会う機会の少ない先生方へのインタビューは緊張しましたが、どの先生方も気さくかつ開け広げにお話くださり、人柄や医師魂、患者さんへの思い、そしてなかなか聞くことのできないプライベートまでも伺うことができ、身近に感じることができました。「この親近感を伝えたい！」私たちの思いが皆様に届けば幸いです。また、先生方のお話を伺うことで在宅医療の課題も浮き彫りとなりました。今回のインタビューが多職種連携のよりよい取り組みにつながればうれしく思います。最後に、今回インタビューにご協力くださった先生方に感謝申し上げますと共に、大切なご家族や猫ちゃんたちと共に健康でありますようお願い申し上げます。(在宅医療への関心を深める班一同)

## 編集後記